おんぶについての幼い頃の記憶と最近の遭遇経験

—大学生に対する７年間のアンケート調査—

Memory as a child and Experience of Encounter in Recent Years on Piggyback

—A Survey of Piggyback on university students—

西川　愛子　Aiko Nishikawa
（家政学部こどもの生活学科）

抄　録

将来の子育て世代となる若者がおんぶに対してどのような考え方をもっているかを明らかにすることを目的に、ここでは大学生のおんぶに対する幼い頃の記憶と最近の遭遇経験について、だっことの比較から検討した。その結果、大学生はだっこに比べ、母親だけでなく父親におんぶされた記憶を持っている者が多いこと、最近おんぶに遭遇した経験はだっこほど多くないことがわかった。また、スーパー等の商業施設や公共交通機関において、母親か父親と思われる人物が素手によるおんぶやベビーキャリーを使ったおんぶをしている姿を目にしていることがわかった。おんぶに対する考え方はだっこと同様、安心な方法やスキンシップが取れる方法ととらえている一方で、親の体に負担がかかる方法であるととらえていることもわかった。

キーワード

おんぶ　piggyback　だっこ　huggy　記憶　memory　遭遇　encounter　大学生　university students

目　次

1　はじめに
2　方法
　2.1　調査方法
　2.2　アンケート対象者
3　結果と考察
　3.1　アンケート対象者の属性
　3.2　幼い頃のだっこの記憶
　3.3　幼い頃のおんぶの記憶
　3.4　最近のだっことの遭遇経験
　3.5　最近のおんぶとの遭遇経験
4　おわりに

1　はじめに

「おんぶ」とは人を背負うこと、または背負われることをさす幼児語である。こどもをおんぶすることができるようになる時期はおおよそ生後６ヶ月前後からといわれており、首がすわることや腰がすわることが目安とされている。特に腕や足に十分な筋力がついていないこどもをおんぶする際は補助具が必需品である。そのため、現在ではこどもをおんぶするための補助具としておんぶ紐やおんぶ帯、子守帯、ベビーキャリーなど様々な名称のものが販売されて

いるが、その定義は明確ではない。

日本におけるおんぶの歴史は古く、古墳から出土した埴輪のなかには女性の背中に幼児とみられるものを背負っている姿をしたものがみられる。また、平安時代以降の様々な風俗画にもおんぶをしている人の姿が見受けられる。ただし、現在のおんぶとは異なり、こどもの上から大人の衣服が被せられていることが多い。江戸時代になると負ぶい帯やねんねこ半纏とよばれるおんぶ用品が用いられる姿が浮世絵などに描かれるようになる。昭和時代前半の写真には父母だけでなく、祖父母や兄姉と思われる人物におんぶをされているこどもの姿が多く残されている。このようにおんぶは日本の子育て文化の中で脈々と受け継がれてきた伝統的な技法であり、おんぶ用品やおんぶ補助具はこうした伝統の中でより簡便におんぶをするために編み出された貴重な用具であるといえる。

ところが、近年、街中でおんぶをしている姿を目にすることはほとんどない。胸の前で紐をバッテンにかける昔ながらのおんぶ紐を用いた姿は皆無である。おんぶ用品やおんぶ補助具だけでなく、おんぶをするという文化そのものが廃れているとも感じられる。一方で、ベビーキャリーなどの補助具を用いてだっこされたこどもやベビーカーに乗せられたこどもの姿を見かけることは多くなった。

そこで、本研究では将来の子育て世代となる若者がおんぶに対してどのような考え方をもっているかを明らかにすることを目的に、ここでは大学生のおんぶに対する幼い頃の記憶と最近の遭遇経験について、だっことの比較から検討することを目的とした。

2　方法

2.1　調査方法

質問紙法によるアンケート調査を実施した。実施期間は 2015 年 7 月～2021 年 10 月の 7 年間に行った。なお、2020 年及び 2021 年はコロナ禍での調査となったが、いずれも対面による調査が実施できたため実施方法や回収方法に変更はなかった。

アンケートを実施するにあたり、アンケートへの回答は無記名式であること、回答内容は機械的・統計的に処理し個人情報の取扱いには十分配慮すること、成績評価には一切関係ないことを伝えて行った。

2.2　アンケート対象者

アンケート対象者は愛知学泉大学家政学専攻・ライフスタイル学科 1 年生及びこどもの生活専攻・学科 1 年生とし、有効回答者数は合計 518 名、平均年齢は 18.4 歳だった。

3　結果と考察

3.1　アンケート対象者の属性

3.1.1　調査年毎のアンケート対象者の性別割合

図 1 に調査年毎にみるアンケート対象者の性別割合を示す。2015 年～2021 年ではいずれも女性が多かった。また 7 年間の有効回答者数の内訳は男性 131 名、女性 379 名で、その割合は男性 26%、女性 74%だった。

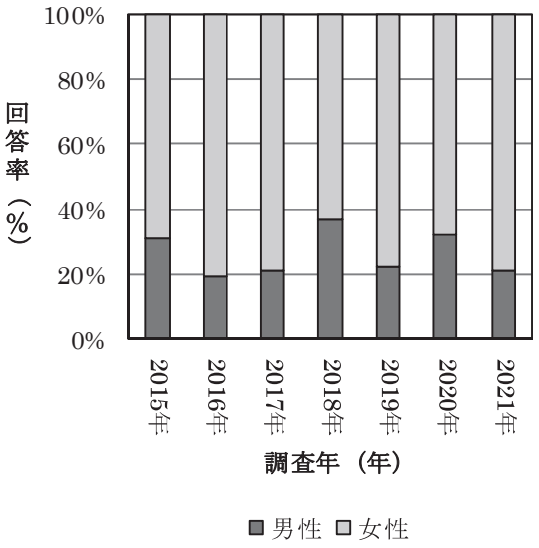

図 1　調査年毎にみる性別割合

3.1.2　調査年毎にみるアンケート対象者の出身地

生活圏による影響を考慮する必要があるのではないかと考え、出身地について尋ねた。図 2 に調査年毎にみるアンケート対象者の出身地を示す。2018 年を除く 6 年間では「西三河」が最も多くなる傾向がみられたが、2018 年では「名古屋市内」が最も多くなった。

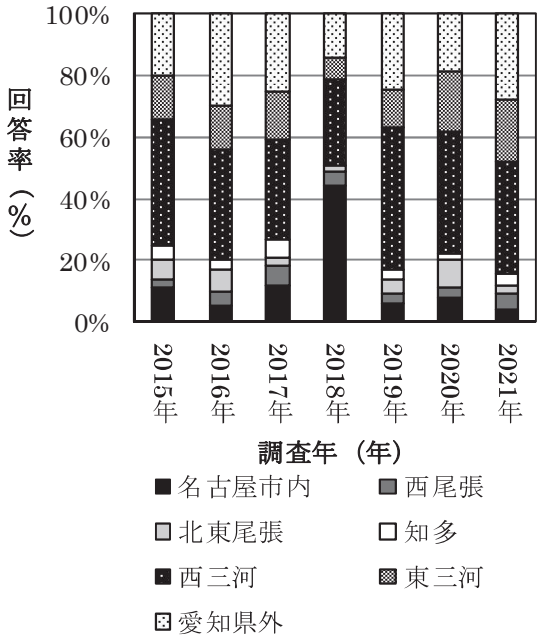

図２　調査年毎にみる出身地

3.2　幼い頃のだっこの記憶

3.2.1　だっこをされた記憶の有無

幼い頃にだっこをされた記憶があるかを尋ねた。図３にその結果を示す。2015 年～2021 年のいずれの調査年でも「ある」の回答が 80%を超えた。このことから多くの対象者がだっこをされた記憶があることがわかった。

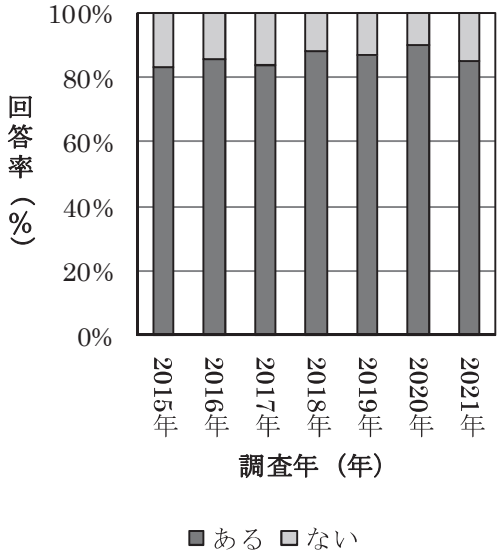

図３　幼い頃にだっこをされた記憶があるか

3.2.2　だっこをしてくれた主な人物

幼い頃にだっこをしてくれた記憶が「ある」と回答した対象者に、その人物は主に誰だったと思うかを尋ねた。図４にその結果を示す。2015 年～2021 年のいずれの調査年でも「母親」の回答が最も多く、次いで「父親」が挙げられた。

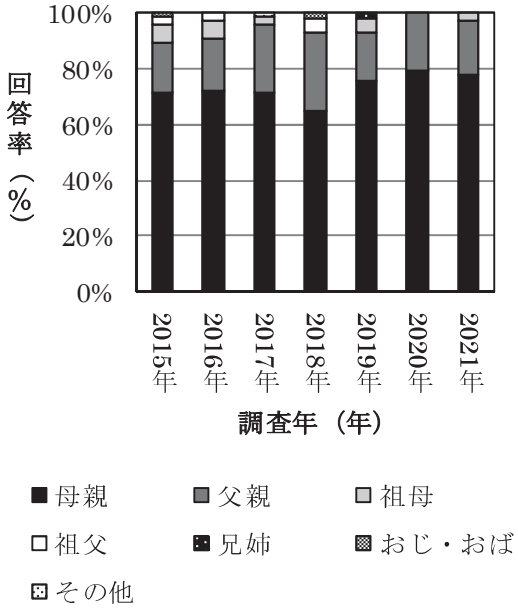

図４　だっこをしてくれた主な人物は誰だったと思うか

3.2.3　だっこをされることが好きだったか

幼い頃にだっこをしてくれた記憶が「ある」と回答した対象者に、だっこをされることが好きだったかを尋ねた。図５にその結果を示す。2015 年～2021 年のいずれの調査年でも「多分、好きだったと思う」の回答が 80%前後だった。

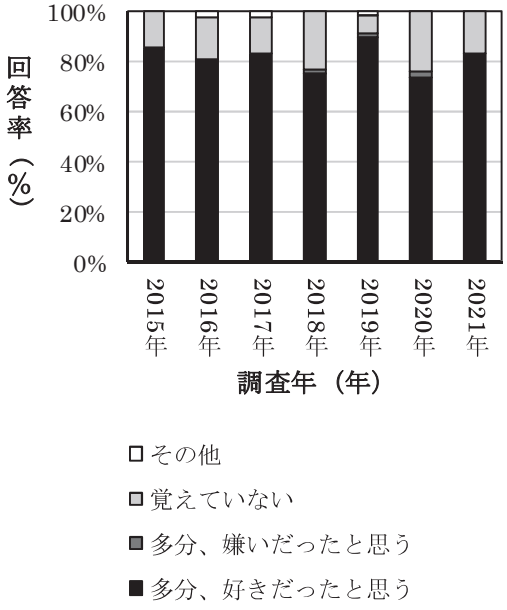

図５　だっこをされることが好きだったか

3.3　幼い頃のおんぶの記憶

3.3.1　おんぶをされた記憶の有無

幼い頃におんぶをされた記憶があるかを尋ねた。図６にその結果を示す。2015 年～2021 年のいずれの調査年でも「ある」の回答が 80%前後だった。3.2.1 で示されただっこをされた記憶と同様、多くの対象者がおんぶをされたことを記憶しているといえる。一方、だっこに比べると「ある」の回答率は全体に低くなった。

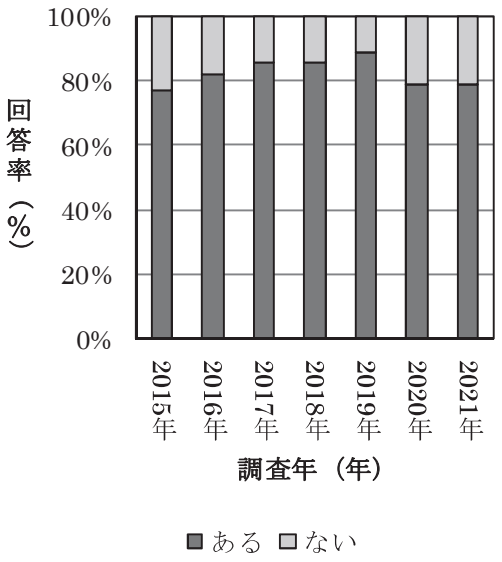

図６　幼い頃におんぶをされた記憶があるか

3.3.2　おんぶをしてくれた主な人物

幼い頃におんぶをしてくれた記憶が「ある」と回答した対象者に、その人物は主に誰だったと思うかを尋ねた。図７にその結果を示す。2015 年と 2018 年は「母親」の回答が最も多くなったが、2016 年、2017 年、2019 年～2021 年では「父親」が最も多く挙げられた。「母親」と「父親」の回答の差があまり大きくない調査年が多く、3.2.2 で示されただっこをしてくれた主な人物に比べ、おんぶは「父親」の印象が強く残っているといえる。

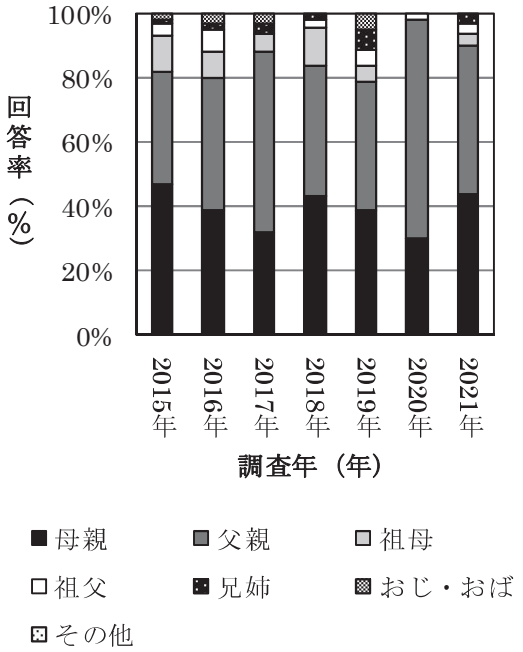

図７　おんぶをしてくれた主な人物は誰だったと思うか

3.3.3　おんぶをされることが好きだったか

幼い頃におんぶをしてくれた記憶が「ある」と回答した対象者に、おんぶをされることが好きだったかを尋ねた。図８にその結果を示す。3.2.3 で示されただっこをされることが好きだったかと同様、2015 年～2021 年のいずれの調査年でも「多分、好きだったと思う」の回答が 80%前後だった。

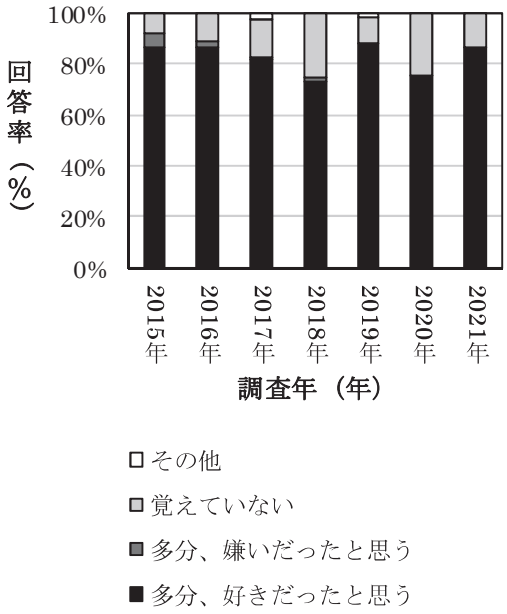

図８　おんぶをされることが好きだったか

3.4　最近のだっことの遭遇経験

3.4.1　最近（過去１～２年）だっこをしている場面を見たことがあるか

最近だっこをしている場面を見たことがあるかを尋ねた。なお、対象者に対し、「最近」とは過去１～2 年のことをさすと指示した。図 9 にその結果を示す。2015 年～2021 年のいずれの調査年でも「ある」の回答が 80%前後となり、多くの対象者がだっこをしている場面を目にする機会があったことがわかった。一方で、調査を重ねるごとに「ある」の回答率が減少する傾向がみられた。

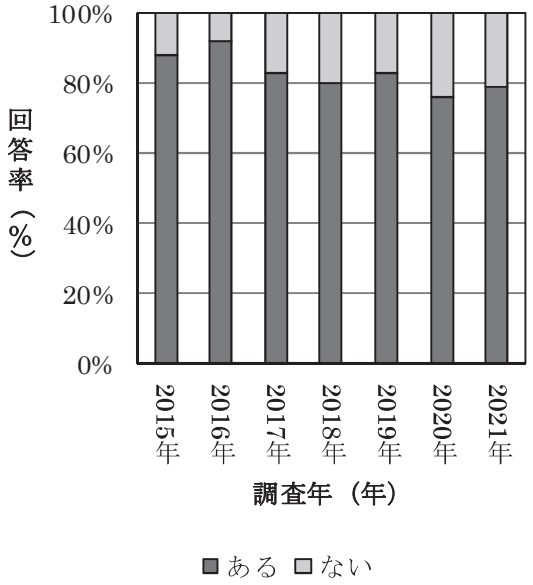

図 9　最近（過去 1～2 年）だっこをしている場面を見たことがあるか

3.4.2　どこでだっこをしている場面を見たか

最近だっこをしている場面を見たことが「ある」と回答した対象者に、どこでだっこをしている場面を見たかを尋ねた。図 10 にその結果を示す。2015 年～2021 年のいずれの調査年でも「スーパー等の商業施設で」と「電車などの公共交通機関で」の回答件数が多くなった。

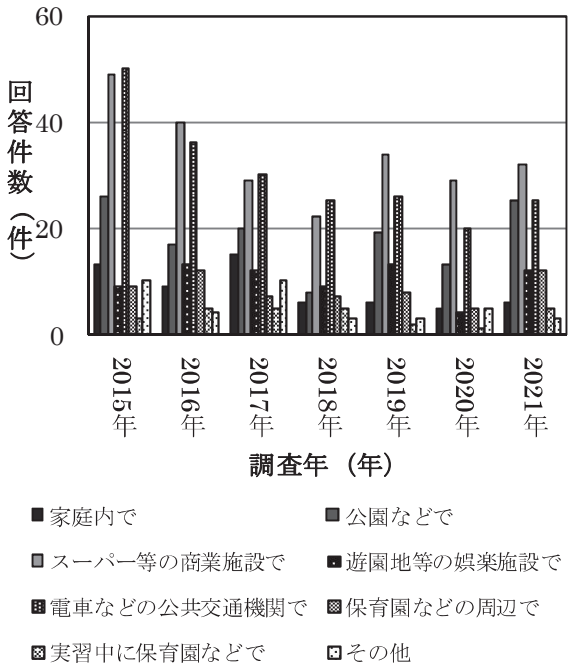

図 10　どこでだっこをしている場面を見たか

3.4.3　だっこをしていたのは誰だったと思うか

最近だっこをしている場面を見たことが「ある」と回答した対象者に、だっこをしていたのは誰だったと思うか尋ねた。図 11 にその結果を示す。2015 年～2021 年のいずれの調査年でも「母親」の回答が最も多く、次いで「父親」が挙げられた。

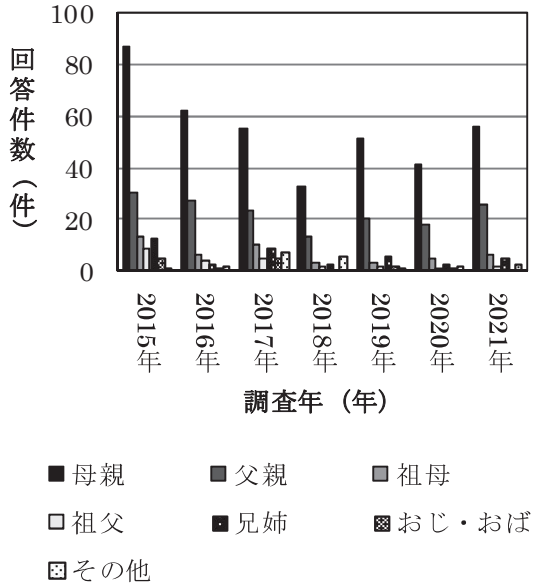

図 11　だっこをしていたのは誰だったと思うか

3.4.4　どのようなだっこをしていたか

最近だっこをしている場面を見たことが「ある」と回答した対象者に、どのようなだっこをしていたかを尋ねた。図 12 にその結果を示す。2015 年～2021 年のいずれの調査年でも「素手による縦だっこ」が最も多く、次いで「補助具を使った対面縦だっこ」が多くなった。

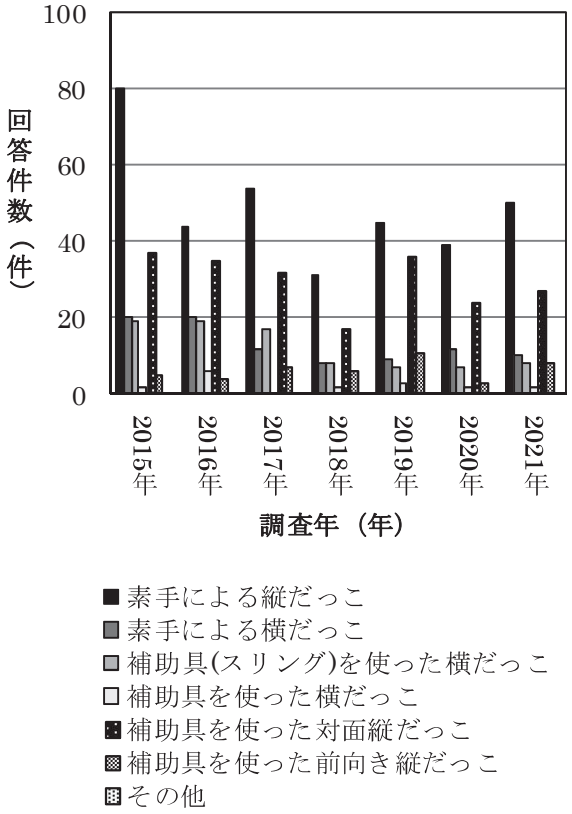

図 12　どのようなだっこをしていたか

3.4.5　だっこをどのような方法だと考えているか

だっこをどのような方法だと考えているか尋ねた。図 13 にその結果を示す。2015 年～2021 年のいずれの調査年でも「安心な方法」と「スキンシップがとれる方法」が多く回答された。また、「安全な方法」や「親の体に負担がかかる方法」が一定数挙げられている。

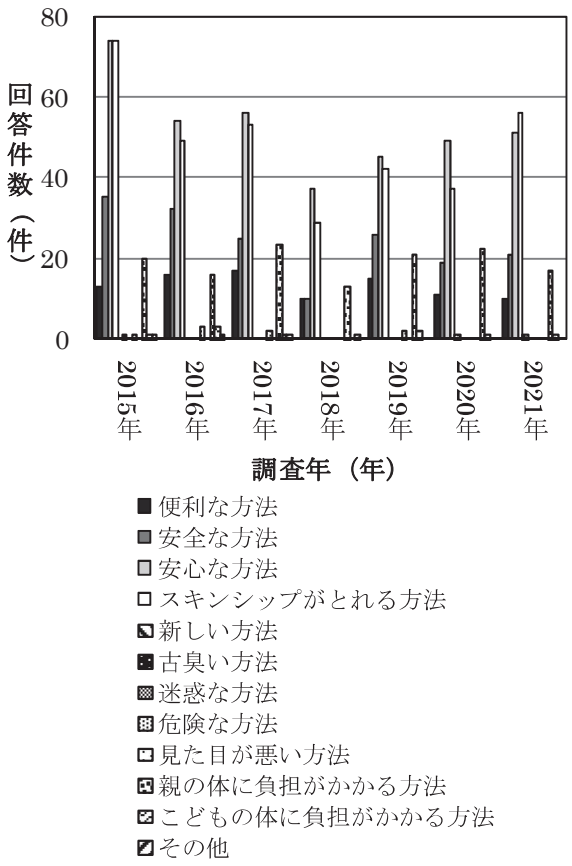

図 13　だっこをどのような方法だと考えているか

3.5　最近のおんぶとの遭遇経験

3.5.1　最近（過去１～２年）おんぶをしている場面を見たことがあるか

最近おんぶをしている場面を見たことがあるかを尋ねた。なお、対象者に対し、「最近」とは過去 1～2 年のことをさすと指示した。図 14 にその結果を示す。2015 年～2017 年までは「ある」が 50%を超えたが、2018 年～2021 年では 50%を下回る回答率となった。3.4.1 で示されただっこをしている場面を見た回答率に比べ、低い値を示していることがわかる。また、調査を重ねるごとに「ある」の回答率が減少する傾向がみられた。

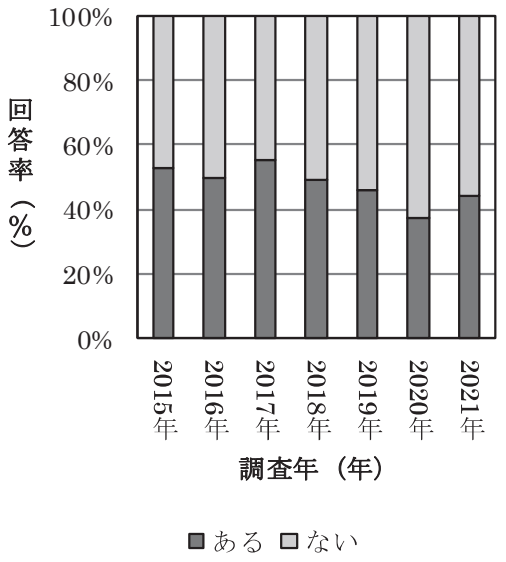

図 14　最近（過去１～２年）おんぶをしている場面を見たことがあるか

3.5.2　どこでおんぶをしている場面を見たか

最近おんぶをしている場面を見たことが「ある」と回答した対象者に、どこでおんぶをしている場面を見たかを尋ねた。図 15 にその結果を示す。2015 年、2017 年～2019 年、2021 年では「スーパー等の商業施設で」が最も多く回答されたのに対し、2016 年と 2020 年では「公園などで」が多く回答された。3.4.2 で示されただっこの回答件数に比べると全体的に少ないことがわかる。

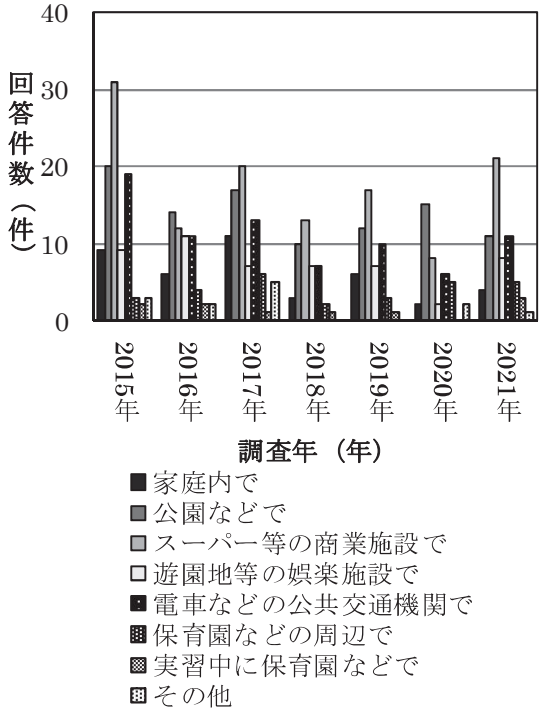

図 15　どこでおんぶをしている場面を見たか

3.5.3　おんぶをしていたのは誰だったと思うか

最近おんぶをしている場面を見たことが「ある」と回答した対象者に、どこでおんぶをしている場面を見たかを尋ねた。図 16 にその結果を示す。2015 年～2021 年のいずれの調査年でも「母親」が最も多く、次いで「父親」となったが、3.4.3 で示されただっこに比べ、「母親」と「父親」の差はそれほど大きくない。

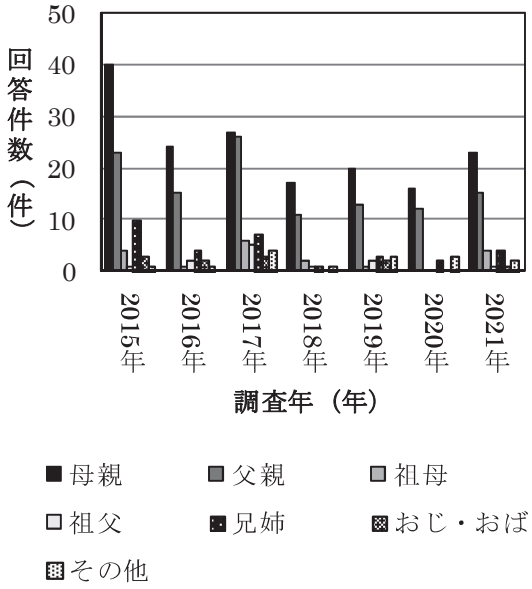

図 16　おんぶをしていたのは誰だったと思うか

3.5.4　どのようなおんぶをしていたか

最近おんぶをしている場面を見たことが「ある」と回答した対象者に、どのようなおんぶをしていたかを尋ねた。図 17 にその結果を示す。2015 年～2017 年、2020 年では「素手によるおんぶ」が最も多くなったが、2018 年、2019 年、2021 年では「補助具（ベビーキャリー）を使ったおんぶ」が多くなった。

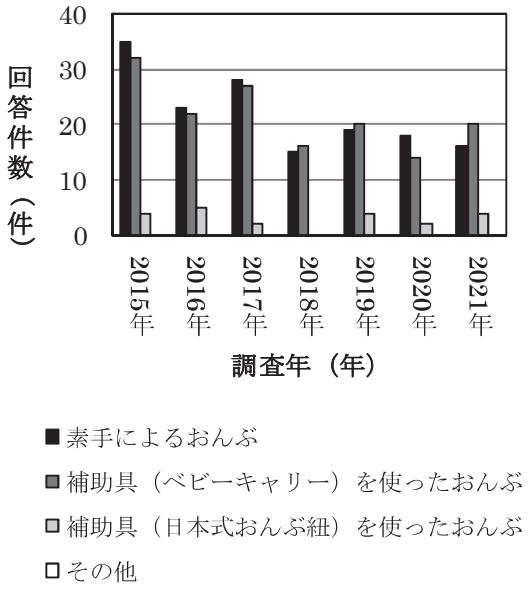

図 17　どのようなおんぶをしていたか

3.5.5　おんぶをどのような方法だと考えているか

おんぶをどのような方法だと考えているか尋ねた。図 18 にその結果を示す。調査年に関わらず「安心な方法」や「スキンシップがとれる方法」が多く回答された。一方で「親の体に負担がかかる方法」も多く回答された。3.4.5 で示されただっこに対するものと同様の傾向がみられた。

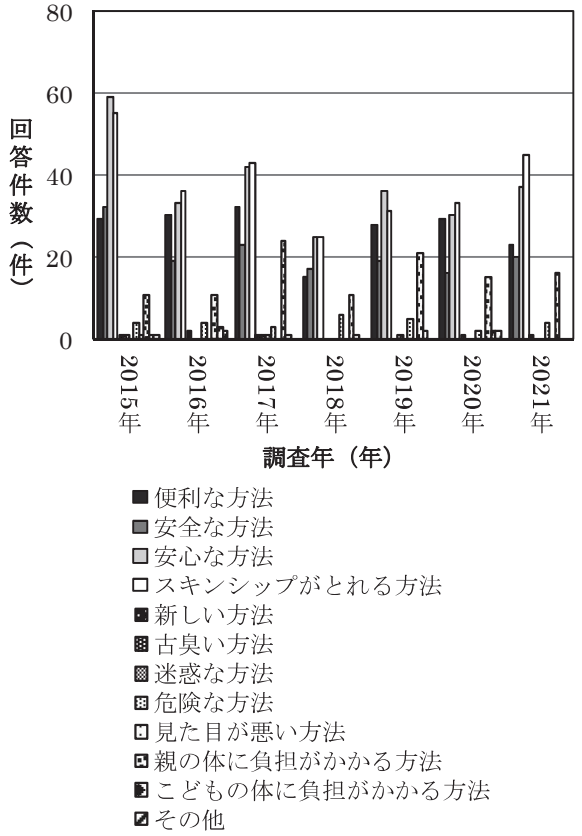

図 18　あなたはおんぶをどのような方法だと考えているか

4　おわりに

大学生のおんぶに対する幼い頃の記憶と最近の遭遇経験をだっこの比較から検討することを目的にアンケート調査を行った。

その結果、大学生はだっこに比べ、母親だけでなく父親におんぶをされた記憶を持っている者が多いこと、また、最近おんぶに遭遇した経験を持つ者は半数前後で、だっこほど多くないことがわかった。おんぶに遭遇した経験のある者は、スーパーや公共交通機関において、母親か父親と思われる人物が素手によるおんぶや補助具（ベビーキャリー）を使ったおんぶをしている姿を目にしていることがわかった。そして、おんぶに対する考え方はだっこと同様、安心な方法やスキンシップが取れる方法ととらえている一方で、親の体に負担がかかる方法であるととらえていることもわかった。

これらのことから、大学生にとっておんぶは、幼い頃の記憶がある程度残っているものであり、減少傾向がみられるものの最近でも目にする機会がある比較的良い印象をもつものであるといえる。しかしながら、今回の結果のうち、特に遭遇経験についての年次推移はそのまま鵜呑みにすることができない。2020 年及び 2021 年のコロナ禍による様々な自制によって大学１年生の生活は大きく変化した。また、おんぶやだっこを必要とする親子の生活も同様であろう。大学生がおんぶやだっこと遭遇する機会はそれ以前のものと異なっていることが想像できるからである。今後の動向を注視していきたい。

参考文献

上笙一郎「子育て　こころと知恵―今とむかしー」赤ちゃんとママ社（2000）
上笙一郎「日本子育て物語　育児の社会史」筑摩書房（1991）
須藤功「写真ものがたり　昭和の暮らし６　子どもたち」農山漁村文化協会（2006）
江戸子ども文化研究会編「浮世絵のなかの子どもたち」くもん出版（1993）
松田道雄「日本式育児法」講談社（1964）
安井眞奈美「おんぶと抱っこの変容―身体技法に関する人類学的研究にむけて―」天理大学学報第 59 巻第 2 号(2008)
福田須美子「おんぶ考―育児様式の変容をめぐって」こども教育研究第３号（2011）

謝辞

アンケート調査にご協力いただきました多くの皆様に心より御礼申し上げます。

（原稿受理年月日：2022 年 1 月 11 日）